

胸骨骨折後遷延治癒に対して低出力超音波治療 (LIPUS) が有効であった高校レスリング選手の1例

○中尾 吉考 (なかお よしたか)(MD), 神頭 諒 (MD), 中山 寛 (MD), 吉矢 晋一 (MD)

兵庫医科大学 整形外科

【目的】

スポーツ活動中に受傷した, 高校レスリング選手の胸骨骨折後遷延治癒に対して低出力超音波治療 (LIPUS) が有効であった1例を経験したので報告する.

【症例】

16歳男性, ベンチプレス中にバーベルを胸の上に落として受傷し, 3ヵ月程度前胸部痛が持続していたが, 徐々に疼痛は軽減した為, 病院を受診せず様子を見ていた. 初回受傷後, 4ヵ月でレスリング試合中に胸から床に叩きつけられて再受傷し, 前胸部痛が再燃し改善しないため, 再受傷後3ヵ月で当院初診となった. 初診時身体所見では, 胸骨の圧痛, 深呼吸時や体幹を捻った際に同部の疼痛が誘発された. 単純X線像やCT像では, 胸骨体部に横走する線状影と, その周囲に骨硬化を伴う所見を認め, 胸骨骨折後の遷延治癒と診断し, 痛みの出るようなトレーニングを禁止して経過観察とした. 運動制限後2ヵ月後のCT像でも骨癒合傾向無く, LIPUSを開始した. LIPUS開始後2ヵ月のCT像で仮骨を認め, 6ヵ月で骨癒合を確認し運動を許可, 8ヵ月でレスリングへ復帰した.

【考察】

胸骨骨折は交通外傷によるものが多く, 保存的治療 (安静) で骨癒合するとされ, 遷延治癒・偽関節例は比較的稀である. また, 本例のようなスポーツ外傷の胸骨骨折後遷延治癒の報告例はない. 治療は手術 (骨移植とプレート固定) の報告もあるが, 合併症のリスクもあり, LIPUSも選択肢の一つとなると考えられた.